



正木健治先生を送る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 美津子, 澤浦, 博, 新井, 英永 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/1075

正木 健治先生を送る

正木先生は、2002年3月をもって定年を迎えられることとなった。先生は、1987年に前任校である神戸商科大学から大阪女子大学に赴任されて以来15年間、英文学科・英語英米文学専攻のイギリス文学分野の中心的存在として教育・研究に尽力されてこられた。この2年間は図書館長としての重責を担われ、ご定年を間近に控えながら会議に追われる毎日であった。

正木先生は定年を迎えるにあたって、定年退職にともなう諸行事をいっさい辞退された。本来なら『女子大文学』の第3号は「正木建治教授退職記念号」となるはずであった。先生のご意志に反して、野暮を承知で、先生を送る言葉をここに記した。おそらく、先生は本号を手にとられて「おい、おい、こんな無粋なこと、困りますよ」とおっしゃることと思う。英文学科・英語英米文学専攻に対する先生の長年のご功労に対する、せめてもの感謝の意を表明したいがためです。先生、ごめんなさい。

正木先生に初めてお会いしたのは、大阪女子大に赴任する前の面接の時だった。場所は新大阪駅構内のとある喫茶店。澤浦さんと金子さんもご一緒だった。コーヒーを飲みながらお話をしたのであるが、正木先生の瀟洒な物腰といかにも大阪風のものやわらかな物言いが醸し出す暖かな雰囲気、面接ということでも少々緊張して強ばっていた気持ちが柔らかく解きほぐされたことを今でも鮮明に覚えている。

正木先生の感性豊かなそして温厚なお人柄がその真骨頂を発揮するのは、なんといっても、卒論、修論の口頭試問のときである。先生は丹念に学生の論文を読んでこられ、いつもできるだけ学生の良いところ、優れた側面を引きだそうとなさる。そして称賛される。しかし、ただべた褒めされるのではなく、論文の至らない点、不満な点をさらりと指摘される。その手際はまさしく名人芸とも言える。先生と試問をご一緒するたびに、その芸を会得しようとするのであるが、未熟者の私には、まだまだ日暮れて道遠しである。

卒論、修論の試問は、先生の洗練された感性を垣間見る絶好の機会でもあっ

た。そしてまた、オスカー・ワイルドやウォルター・ペイター研究で培われた先生の鋭敏な感性と研ぎ澄まされた美意識が仄見える瞬間でもあった。それは、一日に10人以上の学生の試問を担当してへとへとになっているときにたまさか訪れる、まさに幸せな瞬間であった。

年長の兄貴といった雰囲気若い同僚に接して下さった先生に、4月以降キャンパスでお目にかかれないのは寂しい限りである。でも、偶然街でお会いすることはあるかもしれない。ちょっと含羞んだご様子で、「やあ」と片手をあげる先生の姿が今から目に浮かぶ。

鈴木美津子

正木教授が定年退職される三月末が近づき、またしても「歳月人を待たず」という諺を実感させられることになりました。気さくで寛容で温厚な紳士という先生のお人柄を物語る優しい眼差しとにこやかな微笑みに出会えなくなると思うと、大いなる寂しさを禁じ得ません。

先生は御専門のヴィクトリア朝文学だけでなく、詩、演劇、小説、評論を問わず幅広く英文学を愛し、造詣を深められました。女子大では長年「英文学史」や「英文学概論」を担当され、多くの学生がその影響を受け、英文学に興味を抱き、卒論指導を仰いできました。その指導は、磨かれた感性や豊かな想像力と国際感覚を具えた人材を養成するという英語英米文学専攻の目標に相応しいものでした。「木を見て森を見ず」とか「論語読みの論語知らず」とかいった感の強い者たち、つまり英語のテキストの文字面ばかりに拘泥したり、折角文学を学びながら文学の教え伝えようとしていることを理解しない者たちと違って、先生は文学の心が分かる数少ない研究者の一人であられたように思います。毎年、卒論の口頭試問に同席する度に、そう確信しました。

私がお付き合いいただいた九年半の間に、先生は旧英文学科においては主任や入試委員といった骨の折れる役を務められ、学部改組後は英語英米文学専攻の長老として、会議の際、機会あるごとに適切な助言をなさいました。また、最近は図書館長として評議会に参加され、英語英米文学専攻だけでな

く大学全体の管理運営に御尽力賜りました。府立の大学統合という女子大の存亡を巡る大問題が差し迫った今、先生が去られるのは残念至極ですが、これまでの先生の御厚誼に深く感謝いたし、名誉教授として今後も女子大を応援下さることを熱望し、御健勝と益々の御活躍を祈念する次第です。

澤浦 博

私が本学に着任したのが昨年の10月であったため、正木先生とご一緒に教育・研究等に携わることができたのはわずか半年でした。赴任当初も、先生の若々しく颯爽とした風貌から、半年後に定年をお迎えになることがにわかには信じがたく、送別が間近に迫った今でも実感がわいてこないというのが正直なところですが。こうして改めて先生のご退職という事実に向き合ったとき、英文学について、あるいは本学での教育についてご教示いただける期間がせめてあと数年でもあったならばと残念に思う気持ちを禁じえません。実際、学生たちや後に残るスタッフにとって先生がぬける穴がいかに大きいかを思うと、また、英文学分野におけるその穴を埋める努力を誰よりもしなければいけないのは、ウォルター・ペイターやオスカー・ワイルドを中心とした先生のご専門領域に最も近いところを研究している私であろうことを考えると、暗澹たる気持ちにもなってきます。

しかし、新年度が目前の今、泣き言ばかり言っているわけにもまいりません。わずかな期間であったとはいえ、同じ職場にいたことができた幸福をこそかみしめなければいけないのでしょ。う。思えば、着任したてで戸惑うことも多かった私に、先生は温かいはげましの言葉をかけてくださり、いろいろ助言してくださいました。ある良心的な古本屋の存在も教えていただき、『英語青年』の貴重なバック・ナンバーも譲り受けました。何を隠そう、ご退職に際して先生が研究室前に気前よく放出された図書を誰よりも多く頂戴したのも私でしょう。これら諸々のことに深く感謝しつつ、そのご恩に報いる研究成果を残せるよう努めていく所存です。また、来年度は、今年度の正木先生の演習の感化を受けたためキャサリン・マンスフィールドに興味をもつ

た数名の学生の卒論指導を担当する予定です。しっかりとした引継ぎができるよう教育においても努力いたしたく存じます。

退職された後も、お会いしご指導いただける機会があることを期待すると同時に、先生がご健康を維持され、ますますご活躍されますよう祈念いたしております。

新井英永